



絶滅危惧種イトウの再導入実験に 世界で初めて成功しました

当会は本年5月20日(日曜)と同27日(土曜)、北海道後志管内の尻別川産の野生イトウを父母とする人工孵化イトウ(雌2尾、雄3尾=2003年と04年人工授精、満9歳と満8歳)を用い、尻別川産イトウ個体群の遺伝情報を引き継ぐ人工孵化2世魚から初めて、計3200粒の人工採卵と授精に成功しました。また、それに先だつ本年5月11日(金曜)、当会がイトウ再導入実験を続けてきた尻別川支流・倶知安川流域(後志管内倶知安町)で、2004年秋と05年春に試験放流した人工孵化イトウ(計3500尾)のうち、少なくとも1ペアが、親魚となって自力で放流河川に回帰し、正常な産卵行動を行ったことを初めて確認しました=写真。

絶滅に瀕しているイトウ地域個体群の復元に成功した前例は、世界中を見渡して

ありません。当会は1996年の発足以来、国際自然保護連合「再導入のためのIUCN/SSC ガイドライン」や、日本魚類学会「生物多様性の保全をめざした魚類の放流ガイドライン」に依拠しながら、北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場、北海道後志総合振興局、倶知安町役場をはじめとする関係機関や、地元住民のみなさま、さらには支援企業・財団・基金、報道機関などのご協力によって、(A)絶滅要因の特定、(B)生息環境の復元(ダムの魚道付設など)、(C)尻別川個体群の遺伝情報を引き継ぐイトウの畜養と人工増殖、(D)再導入実験の実行と、(E)効果判定のためのモニタリングおよびフィードバック、(F)社会の合意形成——などを進めてきました。このたびの人工孵化2世魚からの

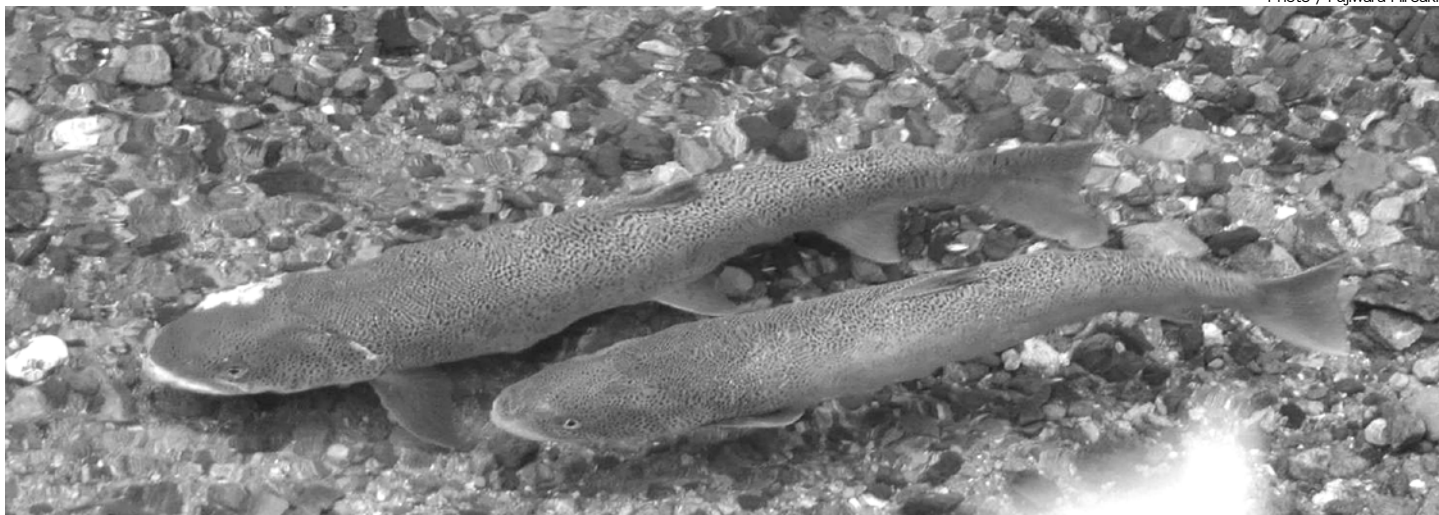
初の人工採卵と授精、および人工孵化放流魚の母川回帰と繁殖行動の初確認によって、世界で初めて、イトウ地域個体群復元の手法を確立することができました。

※ ※ ※

当会のイトウ尻別川個体群復元活動は、会員による会費と寄付、助成などによって運営されています。これまで多くの企業・財団から多大なご支援をいただきました。以下にお名前を記し、改めて深く感謝申し上げます。

パタゴニア日本支社／パタゴニアフットウェア／地球環境基金／日野自動車グリーンファンド／コンサベーション・アライアンス・ジャパン／北海道新聞野生生物基金／セブン-イレブンみどりの基金／まぐろ屋十割(順不同、敬称略)

Photo / Fujiwara Hiroaki



大願成就！ 標識イトウ産卵発見記

オビラメの会 藤原 弘昭

Text & Photo / Fujiwara Hiroaki



5月11日、「オビラメ見守り隊」隊員として「オビラメハウス」に詰めるべく、倶知安町に向かった。見守り隊リーダーの沼田雄一さんには「昼までに来てもらえたら」と言われていたのだが、私にはもうひとつ目的があって、3時間ほど余裕を見て自宅を朝7時に出発した。

目的とは尻別川水系俱登山川支流X川の調査。オビラメの会が再導入実験を実施している小さな沢だ。今年こそ放流魚が産卵遡上してきますように、と願いを込めて、3年前から毎年踏査していたのだが、残念ながらまだ確認できていなかった。

でも今年は違う。つい3日前、やはり川を見に来ていた会員の岩瀬晴夫さんが、俱登山川本流で雄イトウらしい大きな赤い魚を目撃しているのだ。

X川には8時半ごろ到着し、まずは下流側を歩いた。しばらく行くと、水中に魚影らしい動きを発見。ゆっくり近づいてみると……約50cmのイトウだ！ 婚姻色ははっきりとせず、ぼんやりと赤みを帯びた程度だが、おそらく雄だろう。単独である。期待感が急膨張する。

今度は上流に向かって踏査する。やがて川底に礫が見え始めた。この辺りは河岸が笹藪の崖になっていて、水面は2mほど下にある。サイドから回り込んで笹の隙間から水面を覗いた瞬間、ゆらゆらとうごめく大きな2尾の魚が見えた。びっくりして二、三步、後ずさりしてしまった。「これはまさに……！」

気持ちを落ち着かせてもう一度覗き込んだ。まぎれもなくペアのイトウだ。赤い色の雄が約65cm、銀色の雌はそれより10cmほど大きい。10分ぐらい見ていたが、なかなか産卵行動を取ってくれない。何枚か写真を撮ってから、急いで上流を確かめに歩いた。他にもペアがいるかもしれないからだ。しかしこれは空振りし、また大急ぎで先ほどの場所に戻ってみる。すると雌が「カバリング(産卵床の埋め戻し)」の動作をとっている。残念！ 目を離していた隙に産卵放精は終わってしまったようだ。川水は非常にクリアで、しかも崖の上から見下ろしているため水面の反射が少なく、ペアの姿が鮮明に見えた。写真と動画を撮ってから、ケータイで吉岡俊彦事務局長に報告。

吉岡さんもこの朗報を一斉に「オビラメの会」メンバーたちに流してくれた。翌日にはモニタリングチームリーダーの大光明宏武さんが南富良野から駆け付け、産卵床を数えるというので私も同行した。X川の源流部付近まで2～3kmの区間で、ペアは確認できなかったものの、雄3尾を確認。流量は目に見えて減っていて、どうやらこの沢でのイトウ産卵期間は終了とみてよさそうだった。確認できた産卵床は、昨日ペアを確認した地点から上流約300mまでの間に計7カ所。大光明さんによると、うちいくつかはニジマスの産卵床かも知れないとのことだった。

でも少なくとも1ペアが産卵していたのは、この目で確認したので間違いない。授精がうまくいったかどうか、卵が孵化して仔魚が浮上してくる7月が楽しみで仕方ない。

改めて写真で確認したところ、雌はアブラビレがカットされていたので「2004年の秋放流の個体」、雄はアブラビレと左腹ビレがカットされていたので「2005年の春放流の個体」と分かった。放流魚のモニタリング(追跡調査)は、大成功したのだ。灼熱の夏、また寒風吹きすさぶ真冬、大光明さんと苦労して放流イトウたちを探して回った日々は、決して無駄ではなかった。

放流イトウの母川回帰と産卵の確認、というこの喜ばしい成果には、何といても俱登山川の落差工全5基の改良(魚道の設置)が大きく寄与していることを忘れてはならない。この「協働」があったからこそ、イトウたちは戻って産卵することが出来た。

これからも行政とコラボしながら、さらなる「オビラメ産卵母川」を増やしていかなければならない。

藤原弘昭さんのフェイスブックページ
[facebook.com/hiroaki.fujiwara.77](https://www.facebook.com/hiroaki.fujiwara.77)

オビラメ再導入実験 成功の意義

川村 洋司

オビラメの会、北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場

尻別川でイトウが急減したのは、生育環境——十分な食べ物、適切な隠れ場所など——が悪化したせいというより、ダムなど無数の工作物に阻害されて親魚が繁殖場所にたどり着けなくなっていることが最大の原因だと、われわれは仮説を立てていました。今回の放流イトウの遡上確認によって、この仮説の間違っていなかったことが証明されたと言えるでしょう。

じつはこれは尻別川に限ったことではありません。北海道内のほかのイトウ

生息河川、特に個体群が絶滅に瀕している川でも同様なケースが多くみられるのです。今回、尻別川で効果を発揮したいろいろな手法を元に、それら全道の生息地でイトウ産卵環境の復元を試みていけば、絶滅の危機に瀕している北海道中のイトウの資源を回復できる、という可能性が大きく膨らみました。今後のイトウ保護に向けて、非常に大きなヒントが得られたと思います。

もうひとつの大きな意義は、この取り組みが公的機関によるものではなく、地元

の小さな民間団体の活動によって成就した、ということです。

Photo / Hirata Tsuyoshi



2004年に人工孵化させたイトウから採卵を試みる川村洋司さん。尻別川イトウ人工孵化2世魚(満8歳)から今回初めて、人工採卵と授精に成功した。2012年5月20日、倶知安町内の飼育池で。

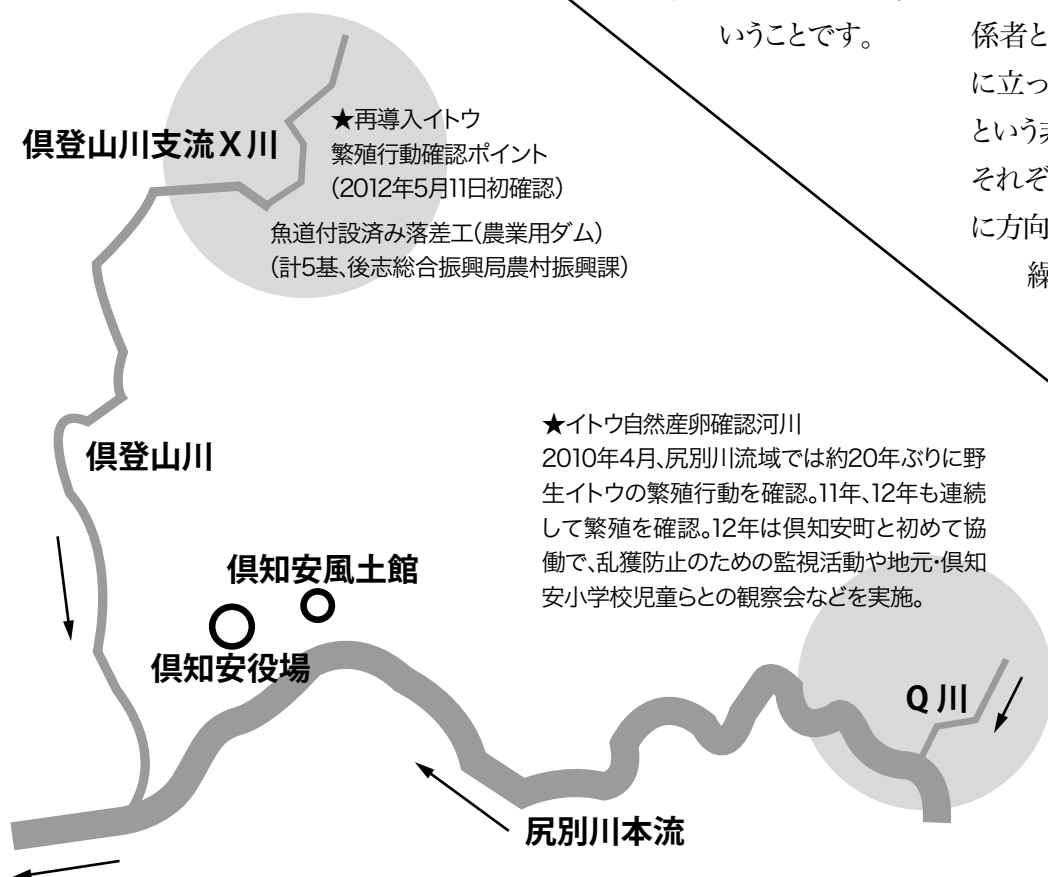
サケ・マスやアユといった魚類と異なり、イトウの産業的価値の高いとはいえません。それが絶滅に瀕している時、保護や復元を進めるのに、地域に根ざした民間団体の果たす役割が非常に大きいのです。

特に今回のように、流域全体の生態系の保全・復元を目指すさい、多くの関係者との連絡調整が欠かせません。間に立って仲介したのが「オビラメの会」という非営利民間団体だったからこそ、それぞれが利害を超えて「イトウ保護」に方向転換できたのです。

繰り返しになりますが、小さな民間団体がこれを見事に成し遂げたことに、とても大きな意味があると思います。地元

に根ざした民間団体のこうした活動に公的機関が目を向け、適切にサポートすることによって地域の希少種保護を進めるという、ひとつの素晴らしいモデルになったと思います。

(2012年5月28日、北海道政記者クラブでのレクチャーから)



オビラメ見まもり隊 活動日誌 2012

沼田リーダー発「オビラメ見まもり隊」メールニュースから

沼田雄一

オビラメの会、「見まもり隊」リーダー



2010年5月、およそ20年ぶりに尻別イトウの自然遡上再開が確認された貴重な産卵地Q川で、今年も延べ100人あまりが24時間体制のパトロールを実施しました。

5月4日

昨日、オビラメの会メンバーがQ川(産卵河川)で複数の雄イトウを確認しました。岡崎館長と連絡を取り、現地確認と今後の監視体制を協議くださいました。雪解けで増水している上に濁りがひどく、密漁の可能性は低いため、予定どおり6日に「オビラメハウス」を設置してから常駐することにします。先ほどチラッと川を見に行きましたが、真っ赤な雄がいても分からないくらい濁ってましたので、とりあえずそっとしておけば大丈夫かと思っています。

5月6日

菅原さんがプレハブの「オビラメハウス」を岸边に設置くださいました。スタイ

ロフォームとカーペットが敷かれていて、一部「土禁」です。ストーブも用意しました。体が冷えたら温まってください。箱の中に飲み物もあります。肝心のイトウですが、朝方から雄が3〜4尾確認されています。お昼にかけて堰堤の上下流に集まっていたようですが、夕方には分散したようです。あちこちウロチョロしているので、まだ雌はいないのかもしれませんが、Q川は本流ほどひどく濁ってはいませんが、増水していて、夕方以降は雄の確認も困難です。密漁も難しいだろうと判断し、今晚は泊まり込みません。ハウス内の電灯だけ、無人の夜も翌朝まで点けっぱなしにしておきます。

5月7日

朝、雄3尾を確認。昼には雌が川底を掘る行動が確認されました。15時半ごろ、雌1尾とピツリ寄り添う雄の姿を確認しました。18時過ぎには雄3〜4尾を確認し、激しい水音を立てての小競り合いもありました。午後から水位も下がり、日の

光も差してきたので、観察しやすくなっています。明日は絶好の観察日和かもしれません。一般の見学者はゼロです。報道されないと分からないのでしょう。朝は4時ごろから見回ります。暗くなるのは19時半を過ぎてからです。見回りもその時間帯に

なるかと思っています。

5月8日

朝から良い天気でした。午前中、昨年産卵していた場所とは違う場所でペア2組を確認しました。別に雄3尾も確認。どちらの雌も10時半頃には産卵床を埋めるような行動をしていました。13時過ぎには堰堤下にペア1組、午前中と同じ場所でペア1組(雌の姿は見えませんが、たぶん雄と一緒に居る感じ)、別に雄2尾を確認。夕方からやや激しい雨が降り、水位・濁りとも上昇中です。



午前中にお菓子の差し入れ付きでご夫婦が、午後にも別々にお一人ずつで、ギャラリーは計4名でした。早朝監視は4時からとっていましたが、この時間だとすっかり明るいため、もう少し早い(薄暗い)うちに巡回をお願いします。

5月9日

午前8時半頃までに雄6尾、雌2尾を確認。そのうち2ペアで産卵が行なわれたようです。10時半頃、倶知安町の福島世二町長と元町長さん視察。また北大の



AI Photos p.4 to p.5 / Hirata Tsuyoshi

先生や倶知安農高の関係者が来られ、差し入れをいただきました。午後は堰堤の下で雌2尾を確認。増水し、濁りが出て、14時以降は雄も確認しづらい状況です。

5月10日

朝6時に1ペアの産卵行動が見られました。11時には雄1尾、雌2尾の変則ペアが産卵行動。15時過ぎからかなり濁ってきましたが、16時過ぎに雄1尾を確認。ギャラリーは3人、また水産孵化場の方が2人、見学に来られました。

5月11日

お昼までに2ペア(全体では雄4、雌2~3尾)の産卵行動を確認。午後から濁ってきました。水産孵化場の方が3人、NHKが取材。早朝に親子連れ、午後から教育委員会1人、総合振興局4人が訪れました。

5月12日



お昼までに雄5、雌2(2ペア)を確認。水位は下がって、午後でもそれほど濁りはありませんでした。NHKが朝5時から撮影。『さわやか自然百景』という番組で8月19日に放映予定とのこと。ほかにギャラリーは朝2人、夕方2人。夕方の2人は倶知安農高の先生で、「イトウ観察パス」を持っていっていらっしゃいました。

5月13日

午前中は雄6、雌2(2ペア)、午後は雄5、雌2(2ペア)を確認。それぞれ産卵行動が観察されました。NHK、さらにHTBも



取材に来ていました。夕方には道新記者さんがみえ、一般ギャラリーも家族連れを中心に約20名ほどと、これまでで最高でした。

5月14日

午前雄3、午後雄4。雌はハッキリとは確認できませんでした。NHK撤収。皆さんによろしくとのことでした。本日のギャラリーは家族連れを含めて15名ほど。本日、HTB「イチオシ」で産卵河川の映像が放送されるとのことです。

5月15日

午前中に雄2尾を確認。見学にきた倶知安小の6年生たちはイトウを見ることができたそうです。その他の見学者は数人で、中には釣り人も。午後、ほとんど増水しなかったものの魚は見つからなくなりました。明日は4年生の見学日ですが、魚を見られるかどうか微妙です。

5月16日

午前中に雄が2尾を確認。4年生たちもイトウを見ることができました。その他の

見学者は数人で、町議さんも立ち寄ったとのこと。

5月17日

午前中に雄2~3尾を確認。午後は雄1尾。見学者は計3、4人といったところですよ。ここ数日、雌は確認されず、そろそろ終了かなという状況です。

5月18日

雄、雌ともに確認できませんでした。見学者はご夫婦1組と建設管理部のお役人、真つ暗になってから道新さんが夜間の監視風景を見に来て、ハウス内で写真を撮って帰られました。明日も魚が確認されないようでしたら、夜間駐在は終了したいと思います。

5月19日

イトウは確認されませんでした。見学者はホタレンジャーの皆さんを含めて26人と、これまでで最高でした。小学生見学の新聞記事を見たので来たという方々でしたが、肝心のイトウがいなくて皆さんガッカリして帰られました。また来年見てもらいましょう。おかげさまで今年の産卵は無事に終了しました。まだ来るかもしれない見学者対応のため、明日はオビラメの会が駐在し、今季の活動を終了します。

5月20日

本日も一応、パトロールしましたが、イトウは確認されませんでした。見学者は2人組×3組でした。魚を見られず残念がっていましたが、「来年また来る」とのことでした。ハウスは窓に「産卵終了」の張り紙をして施錠してあります。数日後に撤去する予定です。最後までトラブルもなく、本日をもって「見まもり」活動も終了です。ご協力どうもありがとうございました！



倶知安町と初の協働パトロール

当会は、倶知安町内のイトウ繁殖河川Q川でイトウ親魚の遡上を見守るために、初めて倶知安町と協働でパトロールに当たりました。倶知安風土館で4月21日、近隣在住の協力者さんたちを交えて「オビラメ見まもり隊」を結成(左の写真)。協力者さんたちには、町教委から規定の委託費(日当)が支給されました。風土館の職員さんや酪農学園大学の学生ボランティアさんを加えた面々に、主に深夜の当直を分担してもらいました。オビラメの会への資金援助は辞退しましたが、サポートのおかげで前年に比べて、会員の出動の負担は軽減されました。

北海道自然環境課と協議を再開

当会を含む道内9団体が加盟するイトウ保護連絡協議会のメンバーたちが5月31日、北海道自然環境課を訪問し、包括的なイトウ保護施策の実現に向けて、担当者たちと意見を交わしました(右の写真)。直接交渉はおよそ3年ぶり。協議会は、河川・治山・農業・水産・環境といった各分野横断的な「イトウ生息地保全のためのガイドライン」の策定を要請。道庁側は「準備中の生物多様性条例とも調整しながら進めていきたい」と応じました。また引き続き綿密に情報交換を続けていくことを確認しました。



2012年度通常総会にご出席ください

【とき】2012年6月23日(土曜)午後1時30分～【ところ】ニセコ町民センター(北海道虻田郡ニセコ町富士見)

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えて、右の郵便口座にお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

オビラメの会ニュースレター 第38号(2012年6月発行)
OBIRAME Newsletter No.38 June. 2012

■発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編集 ■ 平田剛士
■印刷 ■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町3-5-16)
■発送 ■ 吉岡俊彦
■郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局 ■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐろ屋十割」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2012 Obirame Restoration Group
<http://obirame.fan.coocan.jp/>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 0136-44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp